横浜アートサイト2008

横浜アートサイト2008 実施レポート

YAMASHITA PARK

AKARENGA PARK

MINATOMIRAI

Kanazawaku

金沢文庫芸術祭

ART SITE 2008

横浜アートサイト2008　座談会
『地域で行うアート活動の可能性』

日時：2009年2月3日（火）
場所：横浜市芸術文化振興財団 事務局内

座談会メンバー（敬称略）
浅葉和子（金沢文庫芸術祭チーフプロデューサー）
本間 純（アーティスト、AOBA+ART ディレクター）
渡辺美和子（AOBA+ART ボランティアスタッフ）
堀江武史（横浜市市民活力推進局　文化振興課長）
加藤種男（横浜市芸術文化振興財団　専務理事）
司会：菅原幸子（横浜市芸術文化振興財団　協働推進担当グループ長）

本日の座談会のテーマですが、様々な立場から地域でアート活動をする可能性についてお尋ねしたいと思っています。まずは「金沢文庫芸術祭」についてですが、昨年が第10回という節目の年でした。浅葉さんが10年前にこの事業をスタートさせた時の思い、そして10年を経過した今、感じていることをお聞かせ下さい。

浅葉：10年前にスタートさせるときの思いは全くありませんでした。計画していたらおそらく実現していなかったと思います。「楽しいことしたいね」という単純にそういうことだったと思います。
「金沢文庫芸術祭」のイベントとして1DAYイベントとラリアートを開催していますが、10年目でやっと自分がイメージしていた芸術祭がはじめて実現した、やっとスタートラインに立てたと思います。10年やって良かったことのもうひとつは人のつながりが築けた、という点。この10年でジュニアスタッフ「虹のつばさ隊」が育ちました。彼らが自ら月に1回ゴミ拾いをしたり1DAYワークショップの手伝いをしたり、スタッフの一員としてリーダーシップを持って動けるようになりました。彼らの存在によってすごく未来が見られるようになりました。
また、ほかの地域からこの祭りに参加してきた方々が第二の故郷として思ってくれるようになった。自分ひとりでは実現できないことを、芸術祭というひとつの大きな括りの中で、アーティスト、協賛者、行政関係者、ボランティア、みんなの手で実現していく。自己実現の場としての芸術祭の役割は大きいと思います。

「金沢文庫芸術祭」や「創造と森の声」の活動は、『市民が主体となった地域資源を活用したアートプロジェクト』として10年にわたって継続しているものです。このような先例を参考に「横浜アートサイト連携事業＝横浜アートサイト2008」が誕生した訳ですが、横浜市としてはどのような期待を込めているのでしょうか？

堀江：「横浜アートサイト」は横浜市として平成20年度に立ち上げた事業で、中期計画の重点事業にも位置付けて力を入れています。その背景として、横浜市では文化芸術振興施策として文化芸術の創造性をさまざまな分野で活かそう、という取組を行ってきましたが、戦略的に都心臨海部を中心に行ってきました。それは一定の成果を挙げつつありますが、一方でその施策が市民や地域にどれだけ浸透しているか、という課題もあります。また大きな流れとして、文化芸術振興は必ずしも行政が主導してやるものではない、という考え方があります。むしろ現場で取り組む皆さんが、地域に即して活動する、という側面が非常に重要である、と思います。そのような中、横浜市芸術文化振興財団から地域コミュニティに基盤を持つ市民やNPOと協働してアート活動を展開することが重要である、という提案があり、事業化することを検討してきました。横浜の地域が持つ様々な魅力、地域資源を活用し、市民主体で取り組んでいるアート活動を展開していくことができないか、と考えました。「金沢文庫芸術祭」や「創造と森の声」など既存の活動をモデルとしながら新しい活動を推進し、個々の活動の連携をはかることで相乗効果を生み出すことを期待して、この事業を立ち上げました。

「AOBA+ART」は、今年度新たに誕生したアートプロジェクトです。10月の閉幕から4ヶ月が経過しましたが、振り返ってみていかがですか？また、「住宅街で展覧会」というテーマにたどり着いた経緯などお話ください。

本間：この短時間でよく実現できたな、大変だったな、というのが率直な感想です。振り返ってみると、様々な協力者たちが集まってきてくれて予想以上のことができ、すごく楽しかったです。
僕自身アーティストなので、ただ作品を持っていって展示するのではなく、サイトスペシフィックな作品の可能性というものを考えたいと思っています。「青葉区には何かあるか」ということをまず考えて出てきたのが「住宅街」。はじめはそれほどポジティブに考えていなかったけれど、時を重ねて普遍的な風景になりつつあるのではないか、そこで展覧会などを開催するのは面白いのではないかと考えました。
過去にベルギーのヤン・フート（※1）というキュレーターが、住宅街で住人の家の中を使用して展覧会（※2）を開きました。観客が世界中から訪ねてくることに住民は最初戸惑ったらしいんですが、最後にはアーティストのコンセプトなどを完璧に説明できるようになったと聞き、そういうことが住宅街なら出来るかもしれないと思ったんです。
住宅というプライベートな場所に作品がどう入り込んでいくか、作家としては実験的で魅力的なシチュエーションだと思うし、住民にとっては過激なことかもしれないけれど、結果的にコミュニケーションが生まれる。そんな状況の中から、アートの新しい可能性が考えられないかなと思いました。

堀江さんは実際4つのアートプロジェクトを訪れたということで、いかがでしたか？またそれぞれの「横浜アートサイト」の個性というのはどのようなところだと思いますか？

堀江：それぞれ4つのプロジェクトならではの個性的な魅力がありましたが、共通していることのひとつは、人のつながりが生まれたことだと思います。これまでつながりにくかったアーティストと住民の方だけでなく、文化施設のスタッフ、商店街の人々、子どもたちなど、たくさん

の人のつながりができていました。
また「創造と森の声」では、緑区の地域の特色である豊かな自然を活かして、海外からアーティストを呼んで合宿形式などで、いろいろやっている。そうして人と自然とのつながりもできていました。
もうひとつの共通点は、人をつなげる媒介になっているのが「アート」だということです。既存の手法や組織が行き詰っている今、アートが人と人をつなぐことで、横浜の各地域のにぎわいを引き出してくれているのがすごく魅力的だと思いました。

浅葉さんは、チーフプロデューサーという肩書きをお持ちです。具体的にはどのような役割でしょうか？

浅葉：全体的なことを見て、細かいことはやらないと決めています。パニックになるので（笑）。いろんな方に任せて、その進行状況をまとめて見ていきます。実は今年からは隠居生活に入ります。幸いなことに息子が自ら跡継ぎを名乗り出てくれまして。途端に若いパワーが入っていろんな人が集まりはじめて、流れが変わりました。若い力はすごいです。

本間さんは、出展作家としてだけではなく、ディレクターという肩書きもお持ちです。ディレクターというのはどのような役割になるのでしょうか？

本間：はじめは作家として関わるつもりだったので、ディレクターの役割を担うことはかたくなに断っていたんです。でも、作家が実行委員会にコミュニケーションを取るとき、誰に相談していいのかわからない。なので、まずは作家のリーダー的な存在として、ディレクターという名前がついていた方がいいのであれば、と引き受けました。結果的には、組織の役割分担がちゃんとしていなかったので、もう何でも屋です。先ほど（浅葉さんが）パニックになるとおっしゃっていましたが、僕もパニックになっていました。

浅葉：全部自分が背負っちゃうと、病気になります。楽しんでやる気持ちがないと出来ないですね。

本間：そうですね。僕は作家という立場からの意見もわかったので、作家と実行委員会をつなぐ役、あとは企画、ワークショップや展示のコーディネート、なぜか会議の司会も「進行が悪い」と文句を言われながらもやっていました（笑）。

地域でのアートプロジェクトには実行委員だけではなく、様々な地域の方々の協力や参画が重要だと思います。「金沢文庫芸術祭」には、どのような地域の方々が関わっているのでしょうか？

浅葉：立ち上げ当初会場だった称名寺の境内と、現在の海の公園でやるのとでは、ぜんぜん違うんですね。称名寺では、消防団が出たりだとか、商店街が参加したりだとか本当に地元の芸術祭という風でした。それに対して海の公園は新しい土地なので、地元の人にとっては金沢区という意識が薄いんです。なので海の公園に場所を移してからはスタッフも変わりました。現在は金沢区以外からのスタッフもすごく多いです。地元のスタッフは若い人が多いですね。

金沢文庫芸術祭の様子

「AOBA+ART」はいかがですか？

本間：最初は自治会だとか、学校ですね。他にメイン会場となった美しが丘には住民の方が組織されているいろんな会がありまして、その中に知り合いの方がいて、その方がAOBA+ARTの主旨に共感してくれて、他の自治会だとか紹介してくれました。そこで知り合った方々も最後には実行委員会に参加してくれました。

本日は、「AOBA+ART」のボランティアスタッフの渡辺さんにもお越しいただいています。渡辺さんと「AOBA+ART」の出会い、また渡辺さんが担当したことなどを教えてください。

渡辺：本間さんとは他のアートプロジェクトでボランティアとして知り合っていたので、「AOBA+ART」については本間さんから直接お話を伺いました。その時のお話が、「とにかく面白い!」という感じで、興味を持ちました。担当していたことはワークショップでアーティストと住民と一緒に作品制作したり、「AOBA+ART」のスタッフブログの更新などですね。

いま、ワークショップのお話が出ましたけれども、「AOBA+ART」本番の2ヶ月くらい前から、毎週土日にワークショップを行ったとか。

AOBA+ART 会場周辺　Ⓒ Takashi Homma

本間：どうやって住民の方々に参加してもらうのか、はじめはその方法がわからなかった。とにかくワークショップを通じて「AOBA+ART」を住民の方に知ってもらおうという試みでしたが、結果的にすごくよかったです。参加者もはじめは2、3人しかいなかったのですが、最後には部屋がいっぱいになる位の人が来てくれるようになりました。そのワークショップを全面的にコーディネートしてくれたひとりが、渡辺さん。彼女は他の作家たちとも面識があったので、非常によく機能してくれました。

渡辺：「AOBA+ART」の運営は、はじめ実行委員会スタッフが中心で、なかなか進展がなかったんです。それがアーティストが参加しだした途端、いろんな案が出始めて動き出した。「AOBA+ART」の運営にはアーティストの推進力がとても強かったです。スタッフよりもアーティストが自ら問題解決に取り組んだり、スタッフが気圧されるくらいでした。

渡辺さん自身が「AOBA+ART」に関わる中で実現したかったことはどういうことだったのですか？

渡辺：私は他のイベントのボランティアで深く関わりすぎて、これはちょっと距離を考えてやらなくてはと思ってたんです。それで「AOBA+ART」では、自分がやると言ったことをやって、他のことはあまりやらないように決めました。でも実際終わってみたら、ちょっと物足りない。今回、アーティストの方が進めていく事に対して、自分で距離を決めて参加したのに、結局それが自分で不満になって、後悔してしまったんです。プロジェクトに対する関わり方は制限は自分で設けない方がいいですね。

加藤さんは長年にわたり、全国様々な地域アートイベントに関わってきたわけですが、これまでの皆さんのお話を聞く中で、横浜という街になぜ市民主体のアートプロジェクトが必要なのかと考えていますか？

加藤：みなさんも仰ってましたが、人のつながりが生まれてきたというのが重要ですね。我々の目的は、単に芸術文化を振興させるだけではなくて、市民の皆さんの生活と、芸術文化の振興につながりができること。つまり、365万人の横浜市民に、なんらかの形で芸術文化の振興に関わっていただくことが目的で、そのための仕組みを作っていくの

が、我々の仕事です。その仕掛けとして、地域でのプロジェクトをこれからもっとたくさん作るということが必要だと思います。
それと密接に関係していて、先ほど堀江さんがいいことを仰っていました、「アートが人をつなげるんだ」という。人は一人では生きられない、つながってないといけないんですね。アートは人をつなぐ要素を非常に強く持っていて、我々のコミュニケーション能力を開発していく上で、アートはすごく役に立つ。これを活用して、人と人がつながっていくような仕組みを作りたい。
浅葉さんのお話にありましたが、一人で仕事を完結させるのではなくて、なるべくいろんな人と仕事をしていくというのは、実はすごく重要なことですね。大きなイベントのときは、ものすごく大勢の人と接点をもってやっていかないと、あまり上手くいかない。そういうことが、いろんなプロジェクトをやる中でわかってくる。

財団もこれまでは、自らが主催で行うことが中心でしたが、この2、3年は市民の方が主体となったイベントをサポートするという側面が強調されてきています。また、「横浜アートサイト」というのは、それぞれのアートプロジェクトのネットワークを推進していくものです。個々単独のアートイベントと違ったどのような効果が期待できるのでしょうか？

加藤：私は全国の地域アートイベントに関わっているんですが、それぞれが抱えている課題は、どれもよく似ている。それを話し合う場があれば、まず気が楽になります。孤立している人が悩みから解放されたりね。あとは、他のチームの優れているところをみて、ヒントを得られる。また一方で、他を知ることで、自分たちの良さがわかってくる。これはいいことだなと思っています。もうひとつは、複数のプロジェクトがひとつの町の中でネットワークを持っている事例はあまりない。同じ町に住んでいながら、ちょっとジャンルが違うとお互いをまったく知らないというのはよくあることなんです。異なるジャンルの交流が生まれるというのはすごく面白いことで、アーティストをお互いに紹介しあって交流したりとか、発展していきますね。ネットワークは大事です。

ありがとうございます。堀江さんにも同じことを伺いたいのですが。

堀江：個々の事業ごとに担う方だとか、地域の実情によってそれぞれの意義があるので、それを尊重するべきだと考えています。その上で、アートと市民、地域という共通の目標や意識を持っている方々が連携することで、相乗効果を発揮したり、足りないところを補い合ったりという効果があると思います。またそれぞれの観客が、ネットワークを通じて他のイベントを訪れたり、スタッフの方が相互に訪問しあって、いろんな情報を得る効果を高めることが考えられるのではないかと思います。その結果、それぞれのプロジェクトが個々ではなく、いろいろな場所で同時多発的に実施されることによって、面的な広がりが持たせられて、横浜市全体にアートによるにぎわいづくりができたらいいなと考えています。さらに、都心臨海部の事業との連携も重要だと考えています。
人と人、事業と事業のつながりを作っていくためには、横浜市芸術文化振興財団の持つアートの専門性を活かしながら地域活動を支援する総合力に、横浜市としてとても期待しています。

財団、横浜市とそれぞれ、アートサイトの仕組みを考えた立場からの意見でしたが、実際に実行委員の立場として、連携についての効果や期待されることはなんでしょう？

浅葉：今年は隠居生活なので、時間があるので、他のイベントにも行きたいです。いろいろな学びの場だと思いますので。

本間：僕も今年は自分のところで手一杯で、他のイベントには行けなかったんですが、今日のような機会に、他のグループの事情だとか、いいことをたくさん聞けるのは良かった。あと自分たちのグループに対して客観的にみれるようになれましたね。

加藤：シンポジウム(※3)があるというのは、すごくいいね。経験上、ネットワークが出来て、機能するまでに3年くらいはかかると思います。それくらい経つと、交流しているのが普通のこととなりますね。

それでは少し視点を変えて、それぞれがプロジェクトを実施するにあたって課題として捉えていること、必要としている情報などはありますか？

浅葉：やっぱり資金ですね。今の時代ですと、協賛金なども少なくなって、できる範囲でとなると、規模が小さくなっていってしまう。本物のコンサートを市民に伝えたいとか思いはあるのですが。うちの方は、スタッフが普通の主婦だとか、庶民的で、手工業的なことが多い。少しでもアートのレベルを上げていきたいと思うと、例えば今回のようなことをきっかけに、本間さんのようなアーティストにお願いして、来ていただいたりしたいんですが、お願いする以上は交通費とか、制作費とかがかかりますよね。それらについては、これからどうしようか悩んでいます。区ごと助成制度は異なるようですが、こういうもののための助成は絶対必要だと思います。ボランティアには限界がありますし。他にはPRですね。それは「横浜アートサイト」で連携していただければ、だいぶ変わると思います。会場の海の公園スタッフが協力的になってくれたので、それも大きいです。

本間：展覧会をやるにはやっぱりお金がかかるなというのがわかりました。お金のことはこれからネックになると思います。答えはまだないですが、今回のカタログの協賛金はひとつの作戦だと思います。あと図々しいのですが、例えば住民の方に多少でも援助していただいて、それによって住民の方々に自分たちが作ってる展覧会という意識が生まれたら、資金の面でも、一緒に作るという意味でも、いいなと思います。

浅葉和子_Kazuko Asaba
金沢文庫芸術祭チーフプロデューサー、子供のデザイン教室主宰。先住民族文化、アートを中心に地域の街おこし、人興しを実施。

本間純_Jun Honma
アーティスト、AOBA+ARTディレクター。「越後妻有アートトリエンナーレ」、「黄金町バザール」などに参加。

渡辺美和子_Miwako Watanabe
AOBA+ART ボランティアスタッフ。BLOG、ワークショップ担当。ボランティアの立場から色々考えています。

堀江武史_Takeshi Horie
横浜市市民活力推進局文化振興課長。横浜市の文化施策の総合的な企画及び実施、文化芸術活動の支援などを担当。平成18年4月より現職。

その方法はまだ具体的には住民の方と相談中なのですが。お金のこと以外では、役割分担をきちんとしていなかったので、アーティストにもかなり迷惑をかけてしまった。今回は一回目だから許されたという感じなので、これから継続していくためには、しっかり実行委員会を組織して、やっていかなければいけない。そして住民の方にもボランティア参加していただければ、もっといい影響を与えてくれると思います。

渡辺さんはボランティアの立場としてどうでしょうか？

渡辺：やっぱりボランティアの数は少ないですね。今回は地元のボランティアの方がほとんどいなかった。住民の方をどう取り込んでいくかというのは課題のひとつでしたが、知り合いはできても、なかなかそこからボランティアにという話にはならない。来てもらっても、どう手伝ってもらうかが運営側で決まっていない状態で、日々変化していく状況に対応できない。私達や住民の方々のボランティアに対する意識というのもあるのかと思うのですが、これから住民の方にどう広げていくかは大きな課題だと思っています。

加藤：従来だと、参加するアーティストをどうやって選ぶかが重要視されていたのですけれど、それとともに実は一番重要なのは、ボランティアがどれだけ上手く参加できるか、その仕掛けを開発することなんですね。自らが参加して、やってもらうという状態を作りたい。このようなプロジェクトで、一番重要なのはボランティアだということを考えると、ボランティア担当というのが必要になる。アーティストにもアトリエの中だけではなくて、もっと世の中に出てほしい。おそらく、世の中のアートのあり様が変わってきた。新しい表現というのは、自己完結しないような、何をしたいのかは必ずしもわからなくとも表現したい状況があって、そこに市民を巻き込んでやってしまう。
それと「金沢文庫芸術祭」の理念はすごくいい。住民の出会いの場を作る。交流、アートを通して地域文化の活性化。世界とのつながり。これを最初から視野にいれているのは非常にいい。ローカルになればなるほど、世界とのつながりを忘れてしまう。理念は大事です。目指すビジョンがあるということが組織には大事ですね。

浅葉：ビジョンとテーマというのはすごく大事ですね。

加藤：理念、テーマ、コンセプトをきちんと決めればあとは誰かがやりますからね（笑）。「金沢文庫芸術祭」が 10 年続いた秘訣は、これだけ理念がしっかりしているからでしょうね。

浅葉：10 年目から永遠のテーマが決まったのです。「子どもの未来は地球の未来、地球の未来は子どもの未来」

加藤：素晴らしいですね。「AOBA+ART」も、住宅街という面白い資源をなんとかする。住んでいる人からすれば余計なお世話と言われるかもしれないけれど（笑）。でも、少しずつは理解が得られるようになりますよ。

本間：アーティストにとっては、いろんな実験をする場であってもいいと思うし、そこでいろんなことが行われている。でもそんな土地がとてもローカルな場所だというのは、面白いのではないかと思います。

本間さんはアートを活かした各地でのコミュニティ形成について、どういう風に感じてらっしゃいますか？

本間：加藤さんのお話にもありましたけれど、いろんな人を巻き込んで、いろんな人と一緒につくりながらというのが、アートの新しい可能性だと思います。いろんな人とコミュニケーションを重ねることで、自分の表現の可能性というのが、広がる機会になるのではないかなと思うんですね。また一方で、作家としてですが、アートにはいい部分を担うだけではなくて、そこからはみ出していく部分もある意味必要だと思うんです。地域活性化にアーティストが参加するときに、形式みたいなのものができてしまわないようにしようと思っています。

加藤：横浜は、横浜全体としてのビジョンが作りにくいところだなあと最近思うんですよ。それに比較して、例えば大阪で、「水都大阪(※4)」というプロジェクトをやっている。もともと大阪は水の都だった。もう一度、再び水の都にしたい。水辺を全て活用して、運河もあれば、川もある、橋もある、海もある。すべて水に関わることを活用して、元気な大阪をつくろうや、というね。じゃあ横浜はどうだろうというと、港といっても都市の一部だし、全体を統一するテーマというのが作りにくい。ビジョンはなかなかアート以外のジャンルからは出にくいかもしれないので、ぜひみなさんでビジョンを作っていただきたいと思います。アートはビジョンの喚起力が強いですから。

本日はありがとうございました。

脚注
※1 Jan HOET　1936 年ベルギー ルーヴェン生まれ
※2「シャンブル・ダミ展」（1986 年ベルギー ゲント）
※3 市民が支える横浜のアート「横浜アートサイト 2008」シンポジウム
※4「水都大阪 2009」（2009 年 8 月 22 日～10 月 12 日）

加藤種男 _Taneo Kato
横浜市芸術文化振興財団専務理事。企業メセナ協議会研究部会長、アートNPO リンク理事など歴任。様々な自治体に文化政策を提言している。

ー「横浜アートサイト」とは？ー

横浜市、横浜市芸術文化振興財団は、横浜の歴史や自然、街並みなどの豊かな地域資源を活用して、その魅力を発見しつつ楽しめる「アート」の力で「人」と「人」とをつなぐ、横浜市民や NPO 等が展開するアート活動を「アートサイト」と名付け推進しています。
2008 年は 8 月から 11 月にかけて、市内 4 つの実行委員会との協働により「横浜アートサイト 2008」を開催しました。森や海辺、街並みなどを舞台に、アーティストを呼んで街中での作品づくりに取り組んだり、森のなかでワークショップを開催したり…横浜の魅力を引き出し、地域の人々にあらためて紹介するような、オリジナリティ溢れるアート活動を支援しました。

第 10 回金沢文庫芸術祭

＜金沢区＞

10 回目となる今年のテーマを「こどもの未来は地球の未来」とし、参加者全員がアートを通して楽しみながら環境問題を考えられる場となるよう企画されました。ラリアートでは約 2 ヶ月間、金沢区近郊のギャラリーやカフェ・自宅等で、作品の展示やミニコンサート等を出展者が自主開催するイベントが開催されました。また 1DAY イベントでは、横浜ビーチフェスタ特設ステージでのライブをはじめ、作品展示や販売、ワークショップ、パフォーマンス、アートイベントのほか、子どもたちが主役となって練り歩くサンセットパレードなど、一般のお客さまも巻き込んで大きく賑わいました。

サンセットパレード

【イベント概要】

会期： 1DAY イベント 9/14（日）　ラリアート 8/8（金）～ 11/3（月・祝）

会場： 1DAY イベント　横浜 海の公園ほか
ラリアート　金沢区近郊のギャラリーやカフェ・自宅等

参加アーティスト： ロコ・サトシ、村山二朗、金子竜太郎、レブンカムイ、琢磨仁、琢磨啓子 ほか

イベント： 手作り作品ショップが並ぶ「アートストリート」、
衣装や楽器をリサイクル品で手作り体験「ワクワクワークショップ」、
歌や踊りと手作りエコバック作りコーナーなど「虹の翼隊のヒミツきち」、
色んな民族文化に会える「先住民族広場」、世界のダンスが集まる「ダンスステージ」、
おいしい屋台がいっぱい「お祭りフード広場」、
夕日をバックに大仮装パレード「サンセットパレード」、
10 年間の集大成ライブ「スペシャルコンサート」 など

主催：金沢文庫芸術祭実行委員会
共催：横浜ビーチフェスタ
後援：神奈川県、横浜市金沢区、財団法人横浜開港 150 周年協会、横浜市教育委員会、横浜商工会議所、横浜金沢産業連絡協議会、毎日新聞社横浜市局、読売新聞社東京本社横浜市局、tvk、朝日新聞社横浜総局、FM ヨコハマ、財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー
問い合わせ：金沢文庫芸術祭実行委員会事務局
tel & fax/045-788-9119　mail/info@bunko-art.org　**http://www.bunko-art/org/**

上：サンセットパレード
下：虹の翼隊のヒミツきち　フェイスペインティング

【事務局インタビュー】

金沢文庫芸術祭実行委員会　事務局長　浅葉 弾さん

10 回目を終えてようやく地に足がついてきた気がしています。大きな理由は 3 つあります。1 つ目は地元の住民の認知度が高まって、多くの方々にご来場いただき楽しんでいただけたこと。2 つ目は芸術祭らしいテーマが見つかり充実した企画を実行できたこと。3 つ目は素晴らしいスタッフメンバーがそろいみんなが楽しめたことです。ぼくは常にスタッフが楽しめることが最優先だと思っています。企画内容やメッセージも当然大切ですが、スタッフ全員がやる気をだし充実した準備ができなければ素晴らしい企画やいいメッセージが生まれるわけがないと考えています。まさに第 10 回はスタッフ全員が充実できたことが結果につながったと思っています。もちろん反省点や改善しなければいけないことは山ほどあります。第 11 回は今までの経験を活かし、アートを通じたぼくたちのメッセージが一人でも多くの人に伝わるよう前進したいと思います。新スタッフも大勢加わりました。すでに新しい企画を考案して準備活動を始めています。パワーアップする芸術祭をご期待ください！

先住民族広場

先住民族広場

金沢文庫芸術祭
フラッグ

アートストリート

創造と森の声 2008

横浜の森アートランド

＜緑区＞

ズーラシア隣接地にある「よこはま動物の森公園予定地」を舞台に、この森が多くの人たちの活動を通して交流できる場所となることや、自然の変化に寄り添って活動を続けていくことを大切にし、1997 年から開催されている美術展。「横浜トリエンナーレ応援企画」として、森を散策しながら、8 月中旬から翌年 9 月まで展示される 11 名の作家が制作した野外彫刻作品を鑑賞していく「森のインスタレーション」を中心に、主に家族が楽しめる音楽、演劇、ワークショップ、野外料理など多種多様なイベントを開催しました。

森のインスタレーション作品 1 相原慶樹

【イベント概要】

会期： イベント期間 8/16（土）～ 8/31（日）
作品公開制作期間 5/25（日）～ 8/15（金）
作品展示期間 8/16（土）～ 2009/9/27（日）

会場： よこはま動物の森公園予定地

参加アーティスト： 小林唯徳、近田明奈、小林弘茂、米窪洋介、吉野祥太郎、相原慶樹、武内カズノリ、石黒和夫、金森信昭、吉川陽一郎、衛守和佳子、ひとみ座、デュオ・ねこまたぎ、北陸ハリケーンズ、メルカディート、ムンド・ノーボ、関東草笛愛好会、雑技集団鼓舞士、自由演奏会、なんくるないさーず、スンバラ・バナナ、笠井禮示オイリュトミー、マイノリティオーケストラ

イベント： 森のインスタレーション、アートツアー、森の人形劇、夜の森を歩く「真夏の夜の森」、パン・ピザ教室、森のコンサート、地域野菜による食卓「森の料理」、草笛による音楽ワークショップや演奏「子ども音楽会」、音の出るものを持つ誰もが参加可能な音楽界「森で自由演奏会」、クロージングコンサート

プレイベント： 7/21 キャンドルシェイド（陶器）づくりと森の舟づくり

主催：GROUP 創造と森の声
共催：横浜市緑区
運営：横浜の森アートランド実行委員会
後援：横浜市環境創造局、横浜市教育委員会、横浜市旭区
協力：中山商店街共同組合、なごみ邸、月三茶房ギャラリーなごみ
問い合わせ :GROUP 創造と森の声事務局
tel/045-933-1460　mail/ya-man@y8.dion.ne.jp
http://www.morinokoe.jp/

【事務局インタビュー】

GROUP 創造と森の声　事務局代表　石山 克幸さん

2008 年から 2009 年は、私たち「GROUP 創造と森の声」にとって大切な時期になりそうな予感がしています。2008 年の「横浜の森アートランド」は家族が楽しめる森での音楽、演劇イベントをメインにした催しでした。夏の森での催しは雨の影響をもろに受けました。また森のインスタレーション作品は、その展示期間の長さが大きな課題となりました。それらのことは 12 年間の私たちの経験をさらに豊かにし、新しい展開に踏み出すきっかけになると考えています。そして「横浜アートサイト」として他の団体と交流を進めていくことも、また森の近くで行われる横浜開港 150 周年のイベントに関わることも、私たちに与えられたクリエイティブなテーマとして大切に取組むつもりです。いま、2009 年の「横浜の森美術展 3」に向け準備を始めています。この美術展が 2 年目の「横浜アートサイト」とのつながりの中で広がりを持ち、深化していくことを楽しみにしています。

上：森のインスタレーション作品 2 石黒和夫
下：森のインスタレーション作品 3 金森信昭

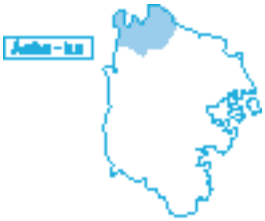
子ども音楽会
ムンド・ノーボの２人

森の人形劇
「ひとみ座」公演

森のピザ

ナイジェリアの
民族料理

Event



AOBA+ART

＜青葉区＞

青葉区を象徴する住宅街を舞台に、アートと生活の場に新しい視点を加えながら街の魅力を再発見する現代美術展を初めて開催しました。
住宅街に作品を点在させ、街を散歩しながら家並みや生活風景なども体感する鑑賞スタイルなど、ジャンルを越えた参加作家がアイデアを出し合って全体構成を決めていき、地域の協力を少しずつ得ながら展覧会をつくり上げました。また商店街と若手アーティストが「食」をテーマにオリジナルメニューの提供や作品展示を行った「AOBA+ART+EAT」、フランスからの来日作家による工芸ワークショップなど、多彩な企画も実施しました。

栗林 隆「ガレージ」

【イベント概要】

会期： 9/21（日）～ 10/13（月・祝）

会場： たまプラーザ商店街、美しが丘 2 丁目・3 丁目、
アートフォーラムあざみ野、青葉台商店街

参加アーティスト： 安部良、池田光宏、ima、栗林隆、祐成政徳、spoken words project、谷山恭子、中津川浩章、原高史、本間純、渡邉五大、オオヤユウスケ、オード・タオン、アニエス・ポール＝ドゥパッス ほか

イベント： アーティストと一緒にお散歩ツアー、ショップ、フランスからの来日作家による工芸ワーク AOBA+ART+EAT、中学校体育館でのシークレットライブ

プレワークショップ： 7/30「らくがきヘルメット」、8/9「らくがきヘルメット 2」、
8/23「香りにふれるアロマアート」、8/24「キューブで見る夢」、
8/30「AOBA メッセージプレート」、9/6「AOBA+ART のポスター作り」、
9/14「青空ってどんな色？」
会場：美しが丘中部自治会館

主催：AOBA+ART 実行委員会
共催：財団法人横浜市芸術文化振興財団、横浜市市民活力推進局
後援：横浜市青葉区、青葉区連合自治会長会、青葉区商店街連合会、横浜美術短期大学、
駐日オードセーヌ県経済事務所、朝日新聞社田園都市支局、美しが丘連合自治会
協賛：イッツ・コミュニケーションズ株式会社、株式会社ワールド、ブリンク、株式会社ダイトー、株式会社合同通信
提供：中川ケミカル株式会社、株式会社大塚商店、デル株式会社、株式会社モトックス、
社団法人日本アルミニウム協会、株式会社谷沢製作所、ユニアート
協賛及び提供：株式会社ウィルコム、kikoritachi
協力：東京急行電鉄株式会社、アートフォーラムあざみ野、ユニマテック株式会社、横浜市立美しが丘中学校、
コーディネート横浜
問い合わせ：AOBA+ART 実行委員会　tel/045-515-4913　mail/info@aobaart.com
http://www.aobaart.com

上:本間 純「267 の空（250 年前にあった家のポートレート）」
下：渡辺五大「みたまいれ（銀のカバの親子）」

【事務局インタビュー】

AOBA+ART 実行委員会　ディレクター　本間 純さん

住宅街で開催された AOBA+ART の作品は、住民の言葉や日常の断片を引き出すものであったり、生活空間にとけ込む、あるいはまったく違う場に変えるものでしたが、それらの多くはこの場所が生み出したものでした。制作過程やワークショップを通しても、住民との交流がたくさん生まれました。会期終了後も、共に旅行へ行くアーティストや、スタッフが夕ご飯にお邪魔したりと、リアルなコミュニケーションが築かれたプロジェクトでもありました。ここから始まったアートの新しいあり方を、どう育てていくかが今後の課題です。

ima
「Imformation Ⅲ」

原 高史
「Sings of Memory AOBA
メッセージパレット」

谷山恭子
「鳥は何羽いるか？」

AOBA+ART+EAT
Coppet のパン

さかえ de つながるアート in 上郷・森の家

＜栄区＞

栄区ならではの人のつながりや、人と自然のかかわりを大切にしたアートイベント。
プレイベントでは、美術家・北川純の作品を区内各地で展示、普段はなじみの薄い現代アートを区民のすぐ身近な場所で紹介しました。
メインイベントでは、地元の福祉団体も参加。栄区の地元産品を活かした食べられるワークショップや、自然の染料を用いた染色ワークショップ、打楽器を使ったワークショップなど、上郷・森の家を舞台に、おとなも子どもも丸一日、自然に親しみながらアートを楽しみました。
また隣接する鎌倉市を拠点に活動する NPO の協力により、気鋭のクリエイティブユニットや、音楽ライブ、映画のほか、フィールドワーク「鎌倉・上郷 MAP ツアー」も実施、栄区の歴史を体験しました。

佐々木貴行「大型紙芝居」

【イベント概要】

会期： 11/1（土）～ 11/3（月・祝）

会場： 上郷・森の家

参加アーティスト： 北川純、生意気、ドゥイ +yoyo.、三縄公一 + はち、工房・野楽、太陽の子、佐々木貴行、サイコバブ（シタール奏者ヨシダダイキチとヨシミによるユニット）、高木完 + パードン木村、鉄割アルバトロスケット、キム・スンヨン、瀬戸山玄

イベント： 作品展示、ワークショップ「つながるアート」、音楽ワークショップ「つながる音リズム広場」、染色ワークショップ「世界に一つ・私色のバックに染めよう。」、栄区産の野菜をつかったエディブルワークショップ「森のピクニック」、手づくりアート広場、ライブ & パフォーマンス、映画上映 & トーク

プレイベント：
1. 竹のキャンドルアート
   ～「キャンドルナイト in さかえ」&「さかえ de つながるアート」
   7/26 会場 :JR 根岸線本郷台駅前
2. 北川純・風船 T シャツアート
   ～「夏休みプラザこども映画会」&「さかえ de つながるアート」
   8/30・31 会場：あーすぷらざ
3. 北川純・ハートの風穴展示
   10/18・25 会場：いたち川周辺、JR 根岸線本郷台駅前

主催：さかえ de つながるアート実行委員会
共催：財団法人横浜市芸術文化振興財団、横浜市市民活力推進局
企画協力 :NPO 法人ルートカルチャー
協力：財団法人横浜市緑の協会、さかえスロー・キャンドルプロジェクト、栄さとやまもりの会、SELP・杜、（有）ニーズランド、太陽の子芸術教育研究所、アートランドヨコハマ、ひかりの広場、さかえ地域通貨プロジェクト（イタッチ）
後援：横浜市栄区
問い合わせ：さかえ de つながるアート実行委員会　mail/info@sakae-art.jp
http://www.sakae-art.jp

上：ライヴパフォーマンス（VJ: 生意気）
下：北川 純「ハートの風穴（JR 本郷台駅前）」

【事務局インタビュー】

さかえ de つながるアート実行委員会　委員長　大塚 宏さん

春先にさまざまなテーマの地域活動をしている区民が集まりました。秋に「森の家」で、アートイベントを行うことだけが決まっていました。何かを感じた人たちによって、今までにない新たな実行委員会が生まれました。メンバーはみな、意欲とゆとりと好奇心がありました。たいへんではありましたが、心地よいたいへんさでした。「つながるアート」というテーマにひかれ、人と人がつながり、人と自然がつながり、人とまちがつながる、いろいろなつながりがあちこちで生まれました。アートがひきがねとなり、その活動はまさに「つながるアート (技、ワザ)」となりました。

セルプ・杜
「ワクワクハート」

「コスモス」

森のピクニック
「地層ごはん」
ドゥイ +yoyo.

さかえの地域通貨・イタッチ

Symposium

市民が支える横浜のアート「横浜アートサイト2008」シンポジウム

「横浜アートサイト 2008」参加団体のイベント期間終了後、全アートサイトの代表者が集まりシンポジウムを開催しました。
各アートサイトからの報告やディスカッションを通して、横浜の地域資源を生かしたアート活動の可能性や、
市民主体のアートイベントの魅力について思う存分語っていただきました。
またその後の交流会では「さかえ de つながるアート in 上郷・森の家」で人気だったエディブルアートワークショップを実施し、
様々な交流がされました。

日時：2008年12月13日（土）13:00〜17:00　会場：アートフォーラムあざみ野 2F セミナールーム

出席者：ファシリテーター：西田由紀子（よこはま市民メセナ協会会長）
（敬称略）**金沢文庫芸術祭実行委員会／浅葉 弾、中山てんらん**
GROUP 創造と森の声／石山克幸、猪野良子
AOBA+ART 実行委員会／本間 純、嘉村真由美
さかえ de つながるアート実行委員会／大塚 宏、岩上百合子

＜交流会ミニワークショップ＞
じっけんのとも ドレッシング編 (tomo Satoh)
地層ごはん feat.yoyo.（ドゥイ）

石山克幸さん（GROUP 創造と森の声）

最初は美術展をやることに楽しみがありましたが、2〜3年後には、高校時代のような文化祭をやる楽しさ、「何がどうなるかわからない」という気持ちを共有して、「裏方のスタッフも主役」という思いでやっています。進め方としては、予算をたてて、スケジュールを組む、様々な所へ申請する ... というのを、みんなで叩いていきます。スケジュールが出ると、やらざるを得ないんですよ。だからそこで覚悟が決まる。毎年「もう今年で終わりかな」という気持ちで臨んでいます。

浅葉 弾さん（金沢文庫芸術祭実行委員会）

スタッフが参加した喜びを感じられる仕掛け作りを大事に考えています。たくさんの来場者が来たとしてもスタッフが楽しめて何か得る事がなくては成功したと言えません。ぼくは、スタッフ全員がモチベーションを高く持って準備にやりがいを感じれるか！を一番大事に考えています。「アートサイト」としては、自分たちのことに精一杯になり他の3企画に行けなかったことと横のつながりを活かしきれていなかった点が反省点です。今後はもっと交流を深めて良い意味でお互い利用できる関係になれればいいと思います。

嘉村真由美さん（AOBA+ART 実行委員会）

AOBA+ART は、今回初めて始動したプロジェクトでしたが、とにかく中途半端なことはしたくなかったんです。それは、アートのイベントではなくても一緒だと思います。ただ、アーティストにとっては貴重な＜作品を発表する場＞。一方、住民の方にとっても『何かやってたね』で終わってしまっては、何も変えていけないし、続かない。そういった実行委員の想いから、現代美術作家のキュレーションに関してはもちろん、アートイベントに対する地域住民の満足度、イベント自体の公共性のバランスを考えてプロデュースしました。

大塚 宏さん（さかえ de つながるアート実行委員会）

よく、まちづくりはハードとソフトのどっちが先かと問題になりますが、結局、両方やらないと、人の気持ちにはフィットしないと思います。今回、アートという切り口があったことで、ハードのまちづくりとソフトのまちづくりが、同時並行してできるんだという実感が持てたような気がします。また多種多様なバックグラウンドを持った人が関わったので、これからそれをうまく編集していければ、今までいろいろ積み上げてきたさかえのまちが、楽しくて、ウキウキする、長く住み続けられるまちになるんじゃないかなと思います。

西田由紀子さん（よこはま市民メセナ協会会長）

各サイトにオリジナリティがあって、横浜全体を見渡した時に、多彩な活動があることがよくわかるシンポジウムだったと思います。同時に、街や人に寄り添って展開していく姿勢や、その場にあるものを活かす ... というお話しから、表現や形式は異なっても各サイト、共通の部分も持っているように思います。いずれのサイトからも、様々なヒントが得られるので、互いに情報交換や交流をすることで、新たなアートサイトの誕生や、さらなる深化、ひろがりが期待できますね。

関 淳一さん（横浜市民ギャラリーあざみ野 館長）

市民ギャラリーあざみ野は、地域のアート活動の拠点施設として、アートのつながりを支援していくと共に、様々な地域の活動を応援していきたいと考えています。今後もアートサイトのような形を通して、それぞれの活動がつながり、継続的に発展をしていくこと、更に4つのサイトのみならず、色々な活動に幅が広がっていくことが望まれます。

Coordinated results

横浜アートサイト連携事業 連携広報の試み

横浜アートサイト 2008 に参加した 4 団体の連携プロモーションを仕掛け、それぞれのアートサイトの魅力を発信。「ヨコハマ・アートナビ」や「広報よこはま全市版」への掲載、「横浜トリエンナーレ 2008」会場における広報など、横浜市中心部の動きとも連動し、都心部と市内地域をつなぐ集客 PR を行ないました。

横浜アートサイト 2008 ウェブサイト
横浜アートサイト参加団体の紹介ページを開設、イベント情報やスタッフインタビューを発信。

ヨコハマ・アートナビ 2008 年 9月号
横浜アートサイト 2008 特集

横浜アートサイト 2008 ポスター

横浜都心部の動き

横浜アートサイト2008 が展開された 2008年秋は、横浜都心部でもアートの活動が活発に展開されました。

横浜トリエンナーレ 2008

日本最大級の現代アートの国際展。第 3 回展となった 2008 年は「TIMECREVASSE タイムクレヴァス」をテーマに、26 カ国・地域より 71 人のアーティストが参加。横浜港の新港ふ頭に新設された「新港ピア」、日本郵船海岸通倉庫（BankART Studio NYK）、赤レンガ倉庫 1号館の 3 つをメイン会場に、2008 年 9 月 13日より 11 月 30 日まで 79 日間にわたって繰り広げられました。

黄金町バザール

かつて違法な特殊飲食店が軒を連ねていた横浜・黄金町を、地域とアートの共存を通じて新たな街並みに再生することを目指したアート・プロジェクト。京急線高架下に誕生した 2 つのアートスラジオを中心に、約 30 組のアーティスト、ショップなどが参加し、アートだけでなく衣食住にわたって、新しい発想を活かしながら街の魅力を発見するイベントが 2008 年 9 月11日～11 月 30 日にかけて多数展開されました。

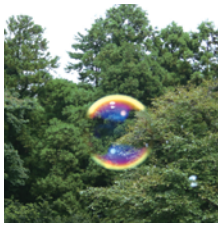
AOBA+ART

Aobaku

BASHAMICHI

Midoriku

創造と森の声



Sakaeku

さかえ de つながるアート

YOKOHAMA A

発行日／2009年3月21日　**デザイン**／野本あや子（at-table）　**印刷**／株式会社ダイトー
編集・発行／財団法人横浜市芸術文化振興財団　〒231-0003　横浜市中区北仲通４－40 商工中金横浜ビル５F　TEL：045－221－0212